
エスケープ～二十歳のレンアイ～

高橋さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エスケープ〜二十歳のレンアイ〜

【Nコード】

N7873L

【作者名】

高橋さくら

【あらすじ】

二十歳の大学生、波子には同じ歳の彼・アツシがいるが、最近二人はうまくいっていない。ある日波子は同じ授業をとっている美里と知り合う。奇妙に重なり合う3人の関係。

波子の思いは、美里の思いは、アツシの思いは、どこへ向かうのか…

私なりの恋愛小説を書いてみました。

First Escape

前方からアツシが歩いてくる。波子は一瞬にして無表情な顔を作り、彼に近づいていった。

「なんだよ、昨日のメール。あれって別れ話？」

アツシは茶色に染めた髪をわざとらしくかきあげながら横柄な口調で言った。

二人の距離が3メートルくらいに近づいた時、波子は足を止めた。

「もう、二度と会いたくない」

波子は顔を歪めながら絞り出すように言う。

「家にもこないで」

目につつすら涙が浮かんでいた。

言葉を失っているアツシを残し、波子は足早に去っていった。

その背中をアツシはしばらく見つめていた。

学生の三分の二は好き放題やっている国際経済学の授業中、波子はお気に入りのファッション雑誌を虚ろな表情でぱらぱらめくっていた。

「最近一緒にいないんだね」

隣りに座っている美里に話しかけられ、波子はゆっくりと顔を美里の方に向けた。美里と波子は知り合ったばかりで、美里が波子に「ノートを見せて欲しい」と声をかけたことがきっかけで二人は仲良くなった。最近二人はずっと行動を共にしている。

「誰と？」

「アツシくん」

波子は雑誌を閉じ、顔をしかめた。

「アツシは…」

アツシは。

アツシは将来ヤクシャになりたいと思っている。エーガのサークルに入っていて精力的に活動している。私はアツシのヤクシャとしての才能を買っている。サークルが作ったアツシ主演のエーガを私は何度か見たことがある。アツシの親友という男が監督で、先日、最新作の上映会が行われ、私は見に行った。

確か。主人公は二人の男だ。彼等はギャンブル好きでお金にだらしくなく、ヤミ金に手を出し、借金が莫大に膨らんでしまう。ヤミ金業者から逃れる為に二人は車であてのない旅を続ける。

それで。結末はどうだったんだっけ？

思い出せない。

オモイダセナイ

美里のアパートは大学から15分程歩いた閑静な住宅街の中にあつた。

似たような細い道を何度も曲がらなければならぬので方向音痴の波子は一人で美里のアパートに行き着く事が出来ない。

「私には無理。覚えられない」と波子が言つと美里はあきれた顔でうちくるの今回で5度目だよね？と嫌味を言ってみせた。

美里の部屋は驚く程殺風景だ。6畳のワンルームには驚く程物が無い。

備え付けの収納、最低限の家具と家電。

アルミのブラインドは若い女性の部屋、というより事務所として使われている空間を連想させた。

部屋に入って向かって右側の壁にはたくさんの写真がピンでとまっていた。

それらの写真はみな風景を写したもののばかりで写真の鮮やかな色は殺風景な部屋に唯一存在感を放っていた。

「これ、どこのお寺？」

波子は写真の一つを指して美里に尋ねる。

「んー、と、ね。京都旅行に行った時の写真なんだけど。平安神宮とか平等院みたいなメジャーなお寺じゃなくてなんとか寺っていうマイナーなお寺」

波子は答えになってないな、とぶつぶつ言い、美里は波子の肩越しにその写真を覗き込んだ。

「よくとれてるでしょ？それ。いいよね、お寺って。流れてる空気感違うし」

その日の美里は機嫌がよく、普段より饒舌だった。美里のしゃべりに耳を傾けつつ波子は一枚一枚の写真をじっくり見ていった。

1ヶ月ごとくらいに変えられる写真たち。全部で30枚程。不規則に配置され、ピン1本でルーズに留められている。

窓から強い風が入ってくる。写真がはたと動いた。

美里は顔をしかめ、窓を少し閉じた。波子は風など少しも気にならないといった様子で写真をじっと見ていた。

その真剣なまなざしに美里は「何？どうかした？」と声をかけたが波子は無反応だった。

「波子？」また声をかけてみる。返事なし。

美里は軽くため息をつくと冷蔵庫から飲み物を取り出す為に立ち上がった。

美里の写真を見ていたら悲しくなった。

アツシを思い出したからかもしれない。

一瞬で好きな「絵」を見つけ、映像にするアツシ。

美里の写真の撮り方に似ている。

似ている。

美里は冷蔵庫から取り出した透明のビンを波子に渡した。

青みがかったビンの中には波子のお気に入りのメーカーのオレンジジュースが入っており、常に冷蔵庫に冷やされている。オレンジジュースは絶やされることはない。

当然美里の仕業なのだがこの気配りに波子は時々恐怖を覚える時がある。

いつか美里は波子の何もかもを知り尽くし、波子の好きな物をすべて周りに並べ、嫌いな物をすべてを遠ざけてしまふのではないかという恐怖。

波子はオレンジジュースを一口飲み、ビンの青みとジュースのオレンジの混ざった微妙な色をしばらく楽しんだ。

美里は波子とおそろいのビンに入ったミネラルウォーターを飲みながら先週二人で行った映画のパンフレットをめくっている。

部屋が徐々に暗くなり、美里の横顔がシルエットになって浮かび上がってくるのを波子はじっと見ていた。

波子はこの時刻が一番好きだった。

このまま部屋の一部になってしまうような感覚。風。

美里がパンフレットをめくる音。

波子は目を閉じた。

次の瞬間、美里の問いかけは波子を一瞬にして現実に戻した。

「アツシくんとはどうなった？」

波子は美里の目をじっと見つめた。

「さっき答えなかった」

淡々とした口調で美里は続けた。

「そういえば」

思い出したように波子は言った。

「アツシの事、なんで知ってるの？」

美里はビンをもてあそびながらちよつと笑っただけだった。

Second Escape

波子が自分のアパートに戻るとドアの前にアツシが立っていた。
iPodで音楽を聴きながら小さく口ずさんでいる。

黒のパーカをだらしくはおり、手には缶コーヒーを持っている。
波子に気がつくのにやりと笑ってみせた。

中に入り波子が何か飲むかと聞くとアツシはちよつと迷っていら
ない、と答えた。

「何か用？もう、うちにはこないでっていったはずだけど」

アツシは返事をしなかった。立ったまま、パーカの裾をいじつて
いる。

波子が冷蔵庫からお茶を出し、コップに注いでいると、アツシはや
つとあぐらをかいて座り、並べてあるCDの中から5秒くらい迷っ
て一つ選び出し、プレーヤーにかけた。

曲が流れ、波子は固い表情を少し緩め、アツシの様子をうかがった。
アツシはようやく波子の方を見た。

「お前、田中と知り合ってたんだな。知らなかったよ」

「なんで美里のこと知ってるの？」

意外な言葉だったので波子は思わず声が大きくなった。アツシは一
瞬目を細めてああ、と言い、ポケットからタバコとライターを出し
て火をつけた。

「お前、あの映画観なかったの？」

「映画？映画は 観たけど 途中まで」

アツシの鋭い視線に波子は怯んだようにうつむいてぼそぼそ答えた。

「あの女、あの映画に出てたんだ。最後の方にちよつとだけ」

「美里がああの映画に？美里はサークルの一員なの？」

「彼女は大賀が連れてきたんだ。サークルの人間じゃない」

アツシは苛立ったような表情を浮かべて立ち上がり、持ってきた缶

コーヒーにタバコを押し付けると責めるように言った。

「何で最後まで観なかったんだよ？」

波子は何か言いたげに口を開いたが、すぐに口をつぐんだ。

「これからどうするんだよ？」

トモ才は怯えた顔で賢治に聞く。

「何そんなに怖がつてんの？」

賢治はむしろ晴れ晴れとした顔で快活に笑う。

「こうしていればどうにもならねえよ」

車は交代で運転すればいいし、眠くなったらお気に入りの音楽をかけて歌をうたえばいい。飽きたら窓の外の景色でも眺めるさ。

トモ才と賢治の逃亡の始まり。

賢治はただひたすら車を走らせる。トモ才はしばらくすると平常心を取り戻す。

二人は逃げる。

波子がだまつたままだったので、アツシはあからさまに不機嫌な顔をし、小さく舌打ちすると部屋から出て行った。

場違いな程明るい音楽がうるさくかかっていた。ぼんやり曲を聴きながら波子はぼつりとつぶやく。

「ばかじゃないの」

波子はプレーヤーのストップボタンを荒々しく押してCDを取り出すと、壁に思いっきり投げつけた。

賢治はトモオに向かつて飲みかけの缶ジュースを投げつける。狭い車の中、よけることもできず、トモオの膝にジュースが飛び散った。
「その耳障りな曲、止めるよ」

トモオは賢治の剣幕に怯えながら音楽を止めた。
賢治はくわえていた煙草を窓から放り投げると大きく舌打ちをした。
トモオは賢治の様子をちらちら伺い聞こえないように小さくため息をついた。

3日たっていた。

既に何かがちよつとずつ狂い出していた。

賢治はトモオの一挙一動にイライラをぶつける。そうされるトモオは日に日に口数が少なくなっていた。

「お前どっか行け。うざい。お前といると」

とうとう賢治はトモオにそう言った。

トモオはしばらくうつむいて唇をかみしめていた。

やがて顔をあげるといきなり奇声を発し、運転している賢治にのみかかった。

「やめろっ」

予測もつかなかった逆襲に賢治は慌てる。トモオは半狂乱になって賢治に殴りかかる。賢治はハンドルを握ったままの状態で必死にトモオから逃れようとする。

「ああああああああああ
トモ才は叫び続けた。

美里と波子は映画を観に出かけた。

人でごったがえす日曜の銀座で待ち合わせ、映画が始まる時間まで
プラントンの中をぶらつき、疲れるとスタバでお茶をした。

美里はアイスコーヒーをストローで一気に吸い上げるとわざとらしく
波子の顔をのぞきこんだ。

「アツシくんから聞いた？映画のこと」

一瞬意味がわからず波子はぽかんとしたがじわじわと表情を曇らせ
た。

「何も聞きたくない」

波子は乱暴にケーキを頬張り、あらぬ方向を見て美里の視線を外し
た。

ちらりと美里を盗み見ると美里は何か考え込んでいるようだった。

「そろそろ時間みたい。いこう」

波子がケーキを食べ終わるのを見計らうかのように美里はトレイを
持って立ち上がった。

「やめろっ。ヒトが、ヒトがいるんだよ！」

トモ才は賢治の言葉に反応し、殴るのをやめ、前方を見た。女が道の真ん中で横たわっている。

車が急ブレーキでとまる。車は女の２メートル程手前で止まった。トモ才と賢治は思わず顔を伏せたが車が止まったことを認めるとおそるおそる顔をあげた。

轢かずにすんだが女はぴくりとも動かない。トモ才と賢治は顔を見合わせるとのろのろと車から降りた。

照りつける日差しに二人は目を細める。女に近づくとトモ才は肩を軽く揺すってみる。女は二十歳前後といったところだろうか。額にうつすら汗をかいて眠っているようだった。女が死んでいるかもしれないという不安から開放されると二人は道に座り込んだ。

「何なんだ？このオンナ」

そう言いながらも賢治の表情はこの状況を楽しんでいるようだった。トモ才は先程まであらわにしていた賢治に対する怒りなどすべて忘れてしまったらしくぼんやりとした表情で女の顔をじっと見ていた。女が目を覚ます。

自分を顔を覗き込んでいる見知らぬ男たちの出現に驚いた風もなく、ぶすつとしながら二人の顔を交互に見た。

「こんな所、クルマ通るんだ」

目をとろんとさせて、また眠ってしまいそうだった。

「冗談じゃねえよ。すんでのところで轢くところだったぜ」

賢治が笑いながら抗議すると女はじわじわと顔を緩め、笑みこぼした。

「ヒトミ」

女は親指で自分を指しながらはつきりとした口調で言った。名前を名乗ったらしい。

「オレは賢治。こいつはトモ才」

賢治が言つとヒトミはゆっくり頷き、周りをぐるりと見回すと急にがばつと立ち上がり、すたすたと車の方に歩き出した。二人はヒトミの後を追う。

Last Escape

映画館はすいていた。二人は適当な空席を確保し、美里は飲み物を買いに行った。波子は既に見ていたパンフレットをめくり、出ている俳優をチェックしていると、美里が波子の分のジュースも買ってきて渡す。波子のお目当ての俳優を「どこがいいの?」とからかう。

“アツシくんから聞いた? 映画のこと”

“あの女、あの映画に出てたんだ”

美里があゝの映画に出ていた。

この事実を知ってから波子はあゝの映画について考えざるを得なかった。

「あの映画」の事は思い出したくもなかった。

「あの映画」と「あの日」の事は。

目を反らし続けていた。

でもそろそろ限界だということを波子は悟り始めていた。

「美里」

低い声のはつきり波子の口からこぼれる。美里はパンフレットから顔をあげて波子を見た。

「美里は…何が言いたいの? あゝの映画に出てたって本当?」

場内が静かになった。映画の予告が始まる。

美里はしばらく口を開かなかった。

やがてぼそぼそとしゃべり出した。

「波子のことをずっと前から知ってた。あゝの映画の撮影に初めて参

加した日にアツシさんと初めて会って…と言っても大賀からいろいろ聞いてたから初対面って感じがしなかったけど。

アツシくんは私がサークルの人間じゃないから気を使ってよく話しかけてくれた。アツシくんは多分自分で認識してる以上にあなたのことしゃべってたと思う。

のろけてる、ってかんじじゃなかったな。

アツシくんが話す波子という女の子はすごく好感がもてた。会ってみたい、って思ったくらい」

波子は先程美里が買ってきてくれたジュースを一口飲んだ。つられたように美里もジュースを口に運んだ。座席にもたれていた波子は体を起こすと、美里がしゃべり出すのを待った。

「上映会の1ヶ月くらい前からアツシくん、波子とうまくいってないんだってこぼしてて元気なかった。でも上映会には来てくれるはずだって言ってた。当日、私の隣りで映画を観ていた女の子が途中で席を立ってそのまま戻ってこなかった」

美里はちよつと黙った。波子はジュースを強く握りしめた。

「その時はわからなかったけど、その女の子は波子だった」

美里はそこまで言うことやつと波子の方に顔を向けた。

映画の予告が終わり、本編が始まった。

波子はバッグとジャケットを荒々しく掴んで立ち上がった。周りの客の迷惑そうな一瞥が注がれる。

「行かないで」

美里は波子の腕を掴んだ。

「私、私…行かないと…アツシと話さなきゃ。今すぐ」

波子はいわごとのように言い、美里の手を払いのけようとしたがその力は思いの外強く、無理だった。

「離して、美里」

波子は、静かに、諭すように美里に言った。

「お願い、離して」

美里はようやく手を離し、波子は出口に向かって小走りに去っていった。

波子が映画館から出ていくのを目の端で確認すると美里の目から大粒の涙が流れた。

美里はゆっくり手で顔を覆った。

あの時私は映画を最後まで見なかった。

あの日、上映会の行われた大教室で私はアツシが来るのを待っていた。

上映時間ギリギリになってアツシは私の知らない女の子と楽しげに話しながら教室に入ってきた。上映会に呼んでおきながら私の存在に気がつきもしなかったし、探すような素振りもなかった。

映画の内容は酷いものだった。二人の男が徐々に関係を崩していった。その様を何度も私達と重ねた。私は1時間程で退席し、キャンパス内をやみくもに歩き回った。こんな映画をぜひ見て欲しいなんてアツシは悪趣味だと心の中でなじりながら。

涙が止まらなかった。この溢れ出る感情はなんだろう？

怒り？悲しみ？……嫉妬？

つらい。ただ、つらいだけだ。

もう、私の生活にアツシなんか、いらない。

そして、私はアツシから逃げた。

そして、現実から

ヒトミは車内でずっと歌っていた。賢治とトモ才は特にしゃべりもせずヒトミの歌に耳を傾けていた。彼女は歌が上手かった。しばらくすると賢治が口をはさんだ。

「その歌、なんてタイトル？」

「さあ…知らない」

ヒトミはそっけなく言って歌うのを止めてしまった。

「トモ才、覚えてるか？FMでこの曲がよく流れてた時期があったな…」

「うん」

トモ才は頷いて、賢治の穏やかな横顔を確認し、小さく安堵のため息をついた。

賢治が機嫌よく話しかけてきたのを何日かぶりだった。

何かが変わった、とトモ才は確信した。

ヒトミは窓を半分開けてタバコを吸い出した。

「帰ろうか」

突然、賢治がぽつりと言った。

「どこへ？」

ヒトミは窓からタバコを投げ捨てると身を乗り出して尋ねる。

賢治はアクセルを一気に踏んだ。車が加速する。

賢治とトモ才は笑っていた。

ヒトミはこいつらヘン、とぶつぶつ言って窓を全開にした。

波子は映画館を出ると携帯の電源を入れ、焦る気持ちを抑え、番号を素早く押した。

携帯がつながり、呼び出し音に耳を傾けながら大きく息を吸う。

……はい

「アツシ？」

……波子？おお、なんだよ。

突然、波子が電話してきてもアツシはいつもと変わらない様子だった。むしろ、この状況を楽しんでいる空気さえ感じられた。

天真爛漫でまっすぐ。空気を読まなくて周りを自分のペースで巻き込む。つき合いたての頃はそんなアツシの性格が居心地よかったわけ、と波子と思う。

多分、その頃とアツシは何一つ変わってないはずだ。

今度は逃げずに向き合えるだろうか？

波子は汗ばんだ携帯を握りなおした。

言葉が出てこない。自分の言動がおかしく思えて波子は笑ってしまっただ。

「ごめん、変だね、私。元気だった？」

……元気だけど。この通り。あつ、見えないのか。

アツシは笑った。

波子も笑った。

そして、波子は一番言いたかった一言を言った。

「これから会って欲しい。私、アツシと会って話したい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7873/>

エスケープ～二十歳のレンアイ～

2010年10月12日00時32分発行